

## Part 20, Vols 75–78: Art History, 4th Series

全4巻 定価(本体86,000円+税)・ISBN 978-4-86340-250-8・菊判

## アメリカ写真の発展

アメリカの写真について書かれた古典的な5冊。この新しいメディアの誕生からのおよそ100年を対象にした、社会的、文化的な歴史、技術、美学論の記録です。

アメリカの写真の歴史は今ではアメリカ研究の確かなジャンルとなり様々なテーマに沿った数多くの学術研究が出版されてきました。アメリカでの初期の写真の歴史を振り返るならば、Samuel F. B. Morse、Edgar Allan Poeらによる銀板写真への強い関心、相当な数の写真スタジオやビジネス機会の出現、人物写真の広まり、戦争報道やアメリカ西部の地質調査、民族学調査の記録、いわゆるコダック革命、芸術写真の発生が想起され、文学、産業、社会、芸術のジャンルとの密接なかわりが見えてきます。

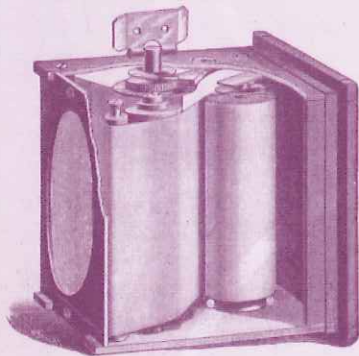


## Contents

**Volume 75: M. A. Root *The Camera and the Pencil; or, the Heliographic Art* (1864)**

ISBN 978-4-86340-251-5・456 pp., 6 pl., ill.・19,000円+税

著者 Marcus Root は 1846 年に最大級の銀板写真スタジオをフィラデルフィアで開業した人物。スタジオはのちにニューヨークに移った。19 世紀の写真に関する著作の多くが基本的に機材操作の解説である中で、本書はスタジオでの人物撮影のあらゆる事柄に触れていること、著者がこの人物撮影の分野で傑出した指導的立場の一人であったこと、19 世紀半ばの写真の理論と実践、専門用語などを記述していること、アメリカの写真についての最初の歴史的な記述であること、そして写真が正当な美的表現手段であるとアメリカにおいてはじめて主張していること、から現在でも重要な資料と位置付けられている。著者はまた多くの写真原版を収集し、1839 年から 1876 年に渡る一大コレクションを形成、その一部は 1876 年のフィラデルフィアでの独立 100 周年記念万国博覧会に展示され、現在ではアメリカ議会図書館の写真コレクションのなかで貴重資料扱いとなっている。



Includes chapters on: Heliography and the Fine Arts • Heliographers • The Sunbeam • Harmony of Colors • The Heliographic Artist and His Sitters • The Sitting Room • Portraiture • Expression • On Coloring Photographs • The Camera and the Microscope • History of the Heliographic Art in the United States • The Heliographic Art: Its Present State and Appliances, and Its Future Possibilities • Index

**Volume 76: Robert Taft *Photography and the American Scene: A Social History, 1839–1889* (1938)**

ISBN 978-4-86340-252-2・558 pp., ill.・23,000円+税

アメリカの写真の歴史をとらえる Root (V. 75) の最初の試みに続く、アメリカの写真の歴史を包括的に扱う本が現れるのに 70 年を要した。Robert Taft による本書は、写真が登場して以降の 50 年間の歴史を社会的また文化的にとらえた画期的な研究。1894 年に宣教師の両親の元に日本で生まれ、アメリカで育った。1925 年、カンザス大学で歴史学修士号、化学博士号を取得、1955 年に亡くなるまでそこで化学を教えた。広範囲に渡る文献調査とかつての写真の世界で活躍した人々から得た古い逸話に基づくこの活き活きとしたこの歴史研究は、いまだに古典として評価されているもの。

First Portraits and First Galleries • The Era of Daguerreotype • Daguerreotypes and the Public • Daguerreotype at Its Zenith • Photography • The Ambrotype • The Family Album • The Tintype • The Stereoscope • “Boston as the Eagle and the Wild Goose See It” • Real Amateurs • Civil War Photographers • Photographing the Frontier • The Cabinet Photograph • Kurtz, Sarony and Mora • A New Age • The Flexible Film • Zoopraxiscopes and Less Wordy Innovations • Photography and the Pictorial Press • Bibliography • Index

**Volume 77: Edward L. Wilson *Wilson’s Cyclopædic Photography: A Complete Hand-Book of the Terms, Processes, Formulæ and Appliances Available in Photography* (1894)**

ISBN 978-4-86340-253-9・514 pp., ill.・21,000円+税

本書の副題に見るように「写真についての用語、工程、化学方式、機材についての完全ハンドブック」である。1894 年の出版時に使われていた知識をアルファベット順に収録した解説書で、現在では理解しづらい 19 世紀当時の写真の技術や用語を知るのに役立つ。著者 Wilson は写真機器と用品の製造と卸販売のかたわら、いくつか影響力のある教材を書いて自ら出版して当時傑出した人物だったが、現在では写真に関する初期の専門誌として最も重要視されている *Philadelphia Photographer* (1864–1914) の出版人かつ編集者として知られる。

Topics include: Albertype • Albumen • Ambrotype • Architectural Photography • Artificial Light • Astronomical Photography • Portable Atelier • Autography • Background • Balloon Photography • Panoramic Camera • Stereoscopic Camera • Detective Camera • Collodion • Copying • Developing • Dry Plates • Enlarging • Fixing • Freak Photography • Fuming • Heliochrome • Kaleidoscope Photography • Landscape • Violent Perspective • Photo-Engraving • Photo-Mechanical Printing in Half-Tone • Picture-Printing

**Volume 78: Charles H. Caffin *Photography as a Fine Art: The Achievements and Possibilities of Photographic Art in America* (1901) & Paul L. Anderson *The Fine Art of Photography* (1919)**

ISBN 978-4-86340-254-6・524 pp., 25 pl., ill.・23,000円+税

20 世紀初期の、写真を独立した芸術形態として確立させようとした試みの典型である 2 冊で、ピクトリアリズムの流行とフォト・セセッション派を背景にした内容。*Photography as a Fine Art* の著者 Caffin はイングランド生まれ、1892 年にアメリカに移り前世紀転換期のもっとも強い影響力を持つ美術批評家の一人となった。彼は様々な美術に関する記事をニューヨークの数々の有名紙誌のほか Alfred Stieglitz の有名な専門誌 *Camera Notes*、*Camera Work* に寄稿、美術史やアメリカ絵画、建築、写真についての本を出すなど、初期モダニズムに理解を示す進歩的な批評家として知られるようになった。本書は写真の芸術性を主張した初期著作のなかで重要なものとされている。*The Fine Art of Photography* も同様に、写真を芸術として進化させることを目的とした内容で、写真の美術的意味について扱い、プロ・アマ問わず写真技術の芸術水準を高めることを目指した。著者 Anderson はピクトリアリズム派の中で仕事をしながら独学で学んだ写真家、写真専門誌に数多く寄稿、何冊かの本を出し、Clarence H. White 写真学校で教えた。

[*Photography as a Fine Art*] The Development and Present Status of the Photograph • Alfred Stieglitz and His Work • Gertrude Käsebier and the Artistic-Commercial Portrait • Methods of Individual Expression • The Landscape Subject • The Figure Subject in Pictorial Photography

[*The Fine Art of Photography*] Composition • Values • Suggestion and Mystery • Landscape Work • Winter Work • Landscape with Figures • Architectural Work • Marine Work • Motion-Picture Work • Portraiture • The Philosophy of the Hand Camera • Index

# 「アメリカ」と「写真」をめぐる歴史的資料

高村 峰生 ●神戸女学院大学准教授

ウォーカー・エヴァンスの1938年の記念碑的な写真集である「アメリカン・フォトグラフィ」というタイトルは、簡潔に「アメリカ」と「写真」の結びつきの強さを語っている。「芸術的な」写真も、商業主義的な写真も軽蔑していたエヴァンスは、ニューディール期に生きる「名もなき人々」を写真に収め、彼らこそが「アメリカ」を代表していると考えたのであった。

写真はアメリカという国の歴史や文化にじつに深く入り込んでいる。もちろん、アメリカに限らず、20世紀以降、写真は世界を覆い、世界を構成している。それは記録の媒体であり、伝達的手段であり、「動かぬ証拠」であり、過去の記憶を喚起するものであり、芸術表現である。写真は、国家の発揚のためのプロパガンダにも、戦争の悲惨さを伝える媒体にもなる。それはつねに事実を伝えるとは限らない。時に、我々を欺く。確かなことは、写真は人類史において数ある発明の内の一つだったというに留まらない重要性を持っているということだ——それは人間の持っている時間や空間、世界のイメージを不可逆的に変質させた。「アメリカ」と「写真」が特権的に結び付くとするならば、それは20世紀という時間がこの国家を抜きに語れないことになかば由来している。この歴史の短い国家は、その多くの部分が写真という媒体を通じて語られてきたのである。

今回、「アメリカ研究基本文献シリーズ」Part 20として復刻される資料群は、ニエプスやダゲール、トルボットらによって1820～30年代に発明された写真がアメリカにおいてどのように受容され、評価され、発展を遂げたかということを知る重要な足掛かりとなる。

具体的に内容を紹介していきたい。

第75巻のMarcus A. Rootによる*The Camera and the Pencil* (1864)は、上に言及したトルボットによる世界最初の写真集である*The Pencil of Nature* (2016年に邦訳も出版されている)に言及したタイトルを持つ、本格的な写真術のハンドブックであり教科書である。その内容は写真の仕組みや構造、写真史的な記述も含んではいないが、中心となっているのは実践的な写真撮影技術であり、光線や背景、被写体の姿勢や目線、表情、コスチュームなど、肖像画を撮影する者がわきまえておくべき事柄について詳述されている。著者のRootは、このような撮影技術の細部への心配りが写真を芸術へと高めると考えていたのである。

第76巻のRobert Taftによる*Photography and the American Scene* (1938)は、*A Social History, 1839-1889*という副題を持つように、写真が発明されてからの半世紀の歴史を、アメリカ合衆国を中心に精緻に辿った一般の写真研究書であり、読んで楽しい書物でもある。たとえば第一章においては、フランスにおけるダゲールの発明がアメリカにおいては半信半疑で受けとめられたという経緯を、当時の新聞が部数を



伸ばすためには平気でデマを掲載していたという事情と共に紹介している。また、モールス信号で有名なモールスがアメリカにおける写真技術の紹介に大きな貢献をしたことも知ることが出来る。このモールスのもとで写真を研究し、南北戦争の従軍写真家として活躍したマシュー・ブラディは1930年代のニューディール期に再評価された写真家であるが、このタフトの書物も彼の地位を確立するのに一役を買っている。

第77巻のEdward L. Wilsonによる*Cyclopedic Photography* (1894)は、写真についてのさまざまな事項がアルファベット順に説明されている事典であり、多くの図解を含んだ丁寧な記述によって構成されている。この書物の存在は、19世紀の終わりころまでには相当程度の数の写真愛好家が存在していたことを物語るとともに、写真とはレンズの種類や暗室の構造、現像液の調合の仕方など、様々な科学的知識を要する複雑な技術であったことを思い起こさせてくれる。

第78巻には芸術論的アプローチによる二つの書物が収められている。まず、Charles H. Caffinの*Photography as a Fine Art* (1901)は、写真を芸術的な表現に高めようとした同時代の写真家たちを評価しようとしたもので、とくにその当時ニューヨークにおいて影響力を強めていたアルフレッド・スティーグリッツとガートルード・ケースピアにそれぞれ一章ずつを割いている。とりわけ、スティーグリッツがこのころ実践し始めていた「ストレート・フォトグラフィー」という手法への言及と考察があるのは、出版時期を考えると、きわめて機敏な反応であると言えるだろう。もう一つの書物Paul L. Andersonの*The Fine Art of Photography* (1919)は、全く対照的に、スティーグリッツによって否定された装飾的な写真表現形式であるピクトリアリズムの価値を擁護した書物である。1919年という時期において、このような主張は保守的に響いたかもしれない。しかし、それもまた一貫した写真芸術観であり、現代においてしばしば議論となるデジタル写真の「加工」の問題とも通じる論点である。これら二冊の書物はともに写真を芸術へと高めようという意志においては共通しながら、その方法においては全く逆になっており、両者が収められた本巻は当時の写真芸術をめぐる争点を浮き彫りにしている。

【発行】

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: 03(3946)2117 Fax: 03(5977)8026

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】